

ドイツとオーストリアにおけるジェンダー研究

ジャスミン・ルカト

Key Words ジェンダー史論、ジェンダー研究、学術史、ドイツのジェンダー研究、オーストリアのジェンダー研究

近年、日本も含め様々な国でジェンダー研究が人気となり、ジェンダーというカテゴリーが人文科学研究の重要な一部と認められるようになってきた。本論文は、こうした文脈において現在ドイツとオーストリアでなされているジェンダー研究の内容及び課題を紹介するとともに、ジェンダー研究が一つの学問として大学に導入された経緯を記す。

本論文ではまず1970年代に起こった女性運動及びそれと連動して設立されたベルリンの女性夏期大学について紹介する。その上でこうした運動に参加したフェミニストたちの中には伝統的な大学制度に強い批判意識を持っていた人々がいたことも指摘する。さらに、女性学の発展をたどり、女性学がジェンダー研究に変更されていったことを示すとともに、ジェンダー研究の六つの制度化の段階を提示する。

70年代以降のアカデミズム側からの反対もあり、ジェンダーを中心とした研究が一体何の役に立つのかという疑問を持つ研究者もいる。こうした人々の疑問に答えるために、ジェンダー研究の進歩を分析して、特にジェンダー研究の制度化とジェンダー論の変化を分析することが必要であろう。ドイツ及びオーストリアにおいてジェンダー研究が導入された過程の一例として、本論文で

は、トランスナショナルな視点から見たジェンダー研究の歴史的発展を可視化したい。

その上で、ドイツとオーストリアにおけるジェンダー研究の成功と失敗、あるいは進歩と後退という観点から現代のジェンダー研究について論じる。ジェンダー研究が大学という場でなされることによってそれがフェミニズムから離れていってしまうのではないかという研究者たちの不安について述べ、そしてその問題点が解決されたか否かを示したい。そのためにウィーン大学及びデュッセルドルフ大学の研究制度に関する問題点を指摘し、最後にジェンダー研究へのバックラッシュについて説明する。

1. 女性運動と大学

ドイツでもオーストリアでも、60～70年代の女性運動は政治界に大きな影響を与えた。女性運動は学生運動と同時期に始まり、女子学生は家父長意識を持つ男子学生を批判し、女性だけのスペースをいくつか大学に作った。大学の教室を利用してゼミや会議などを開催し、コンサート等も行った。むろん、学生のみならず学界外の女性た

ちもこの運動に力を尽くした。中絶権やドメスティック・バイオレンス等、将来のジェンダー研究に関わってくるような課題をめぐる議論も、すでに当時の大学内外の女性たちによって行われていた。彼女たちはそこで歴史学や社会学などの学問の成果を用いた。なお、60年代の旧西ドイツにおける高等教育段階の女性の割合は学部生のうち25%に過ぎなかった。さらに女性教員の割合はわずかに2%であった。オーストリアの事情も旧西ドイツとほぼ同じだが、旧東ドイツのこれらに占める女性の割合は少しだけ高かった (Budde 2002)。つまり当時の大学は男性中心的な環境であり、カリキュラムの中にジェンダー研究はほとんどない状態であったとも言える。男女平等や女性の歴史に興味を持つ学生のほとんどが女性であり、そのようなトピックを研究したくとも、男性の教授に拒否される可能性が非常に高かった。当時多くの人はいくつかの男女ヒエラルキーを当たり前のもものとみなしていた。

こうした問題に対応するため、女子学生たちは大学内に自立的な研究グループを作りはじめた。さらに70年代に入ると学生自治会が比較的大きな影響力を持つようになり、その一部としていくつかの大学に女性部門が設立されていく。そこで、ジェンダーに関する研究を行う必要性が主張されるようになり、70年代の後半には女性部門が設立されるようになった。例えば1977年にグラーツで最初のオーストリア学生会の女性部門が設立され、1976年にはドイツのデュッセルドルフ大学に女性部門が設立された。大学外にも女性文化研究センターや女性文化資料館のような女性に関する専門的資料館が誕生し、自主的なフェミニズム雑誌が出版された。大学外で研究をする研究者は大学の階級制度から脱却することを願って、自らの研究会の運営に民主的な方法を用いた。そうした環境下で1976年に西ベルリンで『クラージュ』(Courage)という雑誌が創刊され、1977年にはアリス・シュヴァルツァーが『エマー』(Emma)という雑誌を発行した。オーストリアでは1974年から2011年まで

女性雑誌『アウフ』(AUF)が発行された。旧東ドイツでは1989年から『ザーウンライターリン』(Zaunreiterin)という雑誌が発行された。そして1976年にいくつかのドイツの大学の女子学生グループがベルリンに集まり「女性の夏時期大学」というイベントが開催され、1週間毎日セミナーや講義が行われた。その後、各年に夏時期大学で議論されたテーマは次の通りである：

1. 女性及び学問 (Frauen und Wissenschaft) (1976)
2. 労働者、無償労働者としての女性 (Frauen als unbezahlte und bezahlte Arbeitskräfte) (1977)
3. 女性及び母親 (Frauen und Mütter) (1978)
4. 自律及び制度 (Autonomie und Institution) (1979)
5. 俗的な日常生活—ラディカルな夢 (Biederer Alltag - Radikale Träume) (1980)

この夏期大学の試みは、現在の女性研究の発展のルーツとして、ある種の神話となっている。夏期大学には学生だけでなく一般の女性も出席でき、毎年数千人の女性が参加した。夏期大学には男性は招待されておらず、女性だけの特別な学問であった。第一回目の夏期大学では、現在ドイツで最も有名な女性史研究者の一人であるジゼラ・ボックが、次のように参加者の目的について語っていた。

「私たちは学術の客体 (Objekt) であり、主体 (Subjekt) である以上の存在になりたい。それを変えたい、社会を“根本的に”変えたい。」(Bock 1977)

本論文の後半では、彼女のこの言葉を再度見直して、現在、ボックのビジョンが実現したのかどうかもう一度考えてみたい。

2. 女性学

1980年代には女性研究に関する講義や女性史に特化した組織の数が増加した。当時の女性研究では、生物学的な性とジェンダーの区別がなされ、女性の性役割や経験の歴史的・社会的影響についての研究が大部分を占めていた。また女性史研究者たちは歴史の中で成功した女性や、家父長制ではない社会を探し求めた。女性が男性に自然に従属しているとするイデオロギーを批判的に脱構築することが研究者たちの課題であった。

ドイツの女性研究史を考えると、個人と社会の関係についての研究や資本主義についての研究等、社会学の伝統が重要な役割を占めていることがわかる。ドイツの女性史、フェミニズムの研究者はその初期からジェンダーと社会的な階級制度との関係、言い換えれば家父長制と資本主義の関係に注目していた。このような研究の背景には、学生運動による社会批判も反映されているが、同時にドイツの社会学の伝統的な近代化批判も反映されている（例えば Becker-Schmidt 1985; Scheu 1977）。第二次世界大戦後、ホルクハイマーやアドルノ等のフランクフルト学派と呼ばれる研究者たちの批判理論がドイツの社会学に大きな影響を与えた。80年代に入ると、彼らの思想がフェミニスト社会学研究に積極的に取り入れられるようになる（Knapp 2012）。批判理論の影響を受け、ジェンダー研究者は教育や政治参加と官僚制、中産階級の意識形成や国民国家形成における性役割との関係などの研究を行った。つまり、女性学の研究者たちは内在的にジェンダー化された権力関係が、いかに女性の日常経験を男性のそれと異なるものにしていくかについて検証したのである。

しかし既存の社会学の世界では、資本主義や階級の問題が主流で、ジェンダーは二次的な問題として扱われる傾向もあった。多くの社会学者はジェンダーの問題、つまり性差別はあくまで資本主義の付随的な現象に過ぎないとみなしていた。それにもかかわらず、社会学におけるジェンダー

研究は、ジェンダーと社会の物質的・象徴的な不平等の再生産の繋がりを探求し続けた。

女性運動はグローバルな運動であったと言われるが、ジェンダー研究の発達にはローカルな違いも多くある。旧東ドイツの場合、1960年代にはすでに女性研究に近い研究が存在していたが、1980年代から女性学と呼ばれるようになった（Dölling 2000）。60年代の研究はもっぱら社会主義における女性の役割についての研究であった。西ドイツとオーストリアの女性学では、西洋の近代化や工業化、資本主義、階級の影響についての研究が特に顕著だった。上記のいくつかの研究については、女性の経験の多様化を見逃してしまったことや、ヨーロッパ中心主義的な側面が指摘されることもある。当時のジェンダー研究は主に、女性がなぜ、どのように疎外や差別に苦しんでいるのかが研究されていた。とはいえ、ドイツやオーストリアの状況を考えると、ナチ時代の女性たちの参与を無視することはできない。ドイツとオーストリアのファシズムの経験を解明するために、ナチ運動に参加した女性や、ヒトラーを礼賛したり軍国主義の栄光をたたえたりした女性が存在した事実は、多くの女性史研究の関心の対象となっていた。戦時中にファシズムへ協力した女性がいたことや戦争責任の問題を追究することを通して、ジェンダー研究は女性の画一的で本質主義的なジェンダー概念の理解からも離れることできた。

大学外のグループにおいても、独立した形で女性に集点を当てたジェンダー研究が続けられてきたが、社会学または歴史研究の中でのジェンダー研究も徐々に尊重されるようになってきた。特に女性史研究が大学における研究分野の一つとして確立された。80年代にはドイツでもオーストリアでも社会民主主義の色合いの強い政府が女性史の研究の育成を援助した。例えば1982年にはドイツのビーレフェルト市で、「女性学の学際的研究グループ」(IFF) が承認された。当初は4年間と期間が限定されていたが、1987年に常設化された。この機関は現在「女性とジェンダー研究学

際的センター」(IFF)と呼ばれている。1983年には、フルダ専門大学が社会福祉学の一部として最初のジェンダー研究教授職を設置し、その後まもなくベルリン自由大学もこの波によってジェンダー研究教授職をつくった。なお、1986年にボン大学でアネット・クーンが女性史学を担当する最初の教授となった。

3. ジェンダー研究の進歩と制度化

1990年代に入ると、ジェンダー研究にパラダイム・シフトが起こった。文科系学問(Geisteswissenschaft)は本質主義的な考え方をどんどん捨てたり、ポストモダニズムや社会構築主義的な認識論が流行する時代となったのである。ポストモダニズムやそれに伴う新しい学際的研究はドイツとオーストリアの学問を変化させ、言説分析や規範分析の研究が増加した。ジェンダー研究においてもメディアやポピュラー・カルチャー、言葉の分析を行うことが当たり前になった。米国の研究者ジュディス・バトラーやダナ・ハラウェイ、ブラック・フェミニズムに大きく寄与したベル・フックスの研究がドイツのジェンダー研究に刺激を与えた。特にジェンダーとセクシュアリティの関係を問う研究がジェンダー研究の注目を集めるところとなった。異性愛規範というコンセプトが紹介されはじめ、この過程でクイア理論に関する研究や性別二元制論に疑問を呈するような研究も増えてきた(例えばEngel 2002)。

それ以前のドイツのジェンダー研究におけるセクシュアリティの分析はそのほとんどが家父長制に由来する女性のセクシュアリティへの抑圧を分析するものであり、男性同性愛者の経験やトランスジェンダーの経験が学術的なテーマとして扱われることはあまりなかった。ポストモダニズムの広がりによって、女性史を中心に研究をしていたジェンダー研究者と若い世代のクイア理論に近いジェンダー研究者との関係はやや疎遠になってき

た。またポストコロニアリズムに刺激を受けた研究も登場した。このように、1990年代にいくつかの新しいジェンダー研究プログラムが設立され、女性史の研究者が築き上げたインフラを使用してきたそれまでのジェンダー研究に対して、異なる見解を持つ研究方法によるジェンダー研究が現れてきた。

2000年にドイツとオーストリアで大学構造改革が起こり、欧州委員会が推奨する学士号と修士号の新しいシステムが導入された。この新しいシステムに合致するジェンダー研究の教育課程が作られたが、その中では「女性史」という言葉はあまり扱われず、英語の用語である「ジェンダー」(gender)研究が増加した。

ジェンダー研究の内容が変化すると同時に、その制度化も進んだ。本論文では、ジェンダー研究の制度化プロセスをよりわかりやすく把握するため、この制度化を下記の6つのプロセスに分けた。

▶第一期：ジェンダーリサーチセンターの設立の流れが80年代に始まり、90年代まで続いた。大学生、学生会の女性会員、女性運動に参加していた若い研究者たちが研究会を始めて、そこからジェンダーリサーチセンターが設立されたボトムアップ的なアプローチもあれば、行政や大学長により設立のプロセスが始まったトップダウン的なアプローチもある。

▶第二期：80年代後半から、大学生のための学際的なジェンダー研究に関する教育課程が作られ、その適格性が認可されて一つの科目として新しい講座や研究部門が主体的に設置されるようになる。カリキュラム作成のためには、研究方法なども確立されなければならなかった。そして博士前期課程におけるジェンダー社会科学専攻がいくつかの大学に設置されはじめた。

▶第三期：2000年代には学際的な大学院用のプログラムが設置されて、博士課程でもジェンダー研究者が協力して研究を行うことができるようになった。

▶第四期：2003年にはドイツで、すべてのジェンダー研究プログラムのメンバーのための初めて

の会議が開催され、その延長で2006年にはジェンダー研究協会共同の包括的組織（umbrella organization）が設立された。

- ▶ 第五期：2010年にはドイツのジェンダー研究者の専門委員会、2012年にはオーストリアのジェンダー研究専門委員会が誕生した。
- ▶ 第六期：現在、ジェンダー研究を独立した専門分野とすることについての議論が続けられている。実は2000年から今日までの間に、研究所数自体は少し増えているが、すでに終了したジェンダー研究プログラムもいくつかある。終了の理由としてはジェンダー研究に対するのバックラッシュもあり、また2009年の金融危機の影響を受けての資源不足もあった。そのためジェンダー研究の講座を担当する教員の数は2000年からあまり増えておらず、現在ジェンダー研究学講座の割合はドイツ・オーストリアの大学にあるさまざまな講座のうち0.5%にとどまっている。

4. 現在のジェンダー研究とフェミニズム

本論文ではジェンダー研究に伴う議論をいくつか紹介してきた。このような議論はすでに20年ほど存在しているが、現在もまだ多くの論争が残っている。しかし、この20年、どのような言説がより強く広がったのか、またジェンダー研究が何を達成したのかを論じることはできる。

まず、ジェンダーとフェミニズム科学研究、そして女性史との関係について述べる必要がある。先述したようにジェンダー研究はフェミニストの学者や女性学の学者の仕事の上に確立されてきたが、そこには対立も存在してきた。前節で紹介したようにジェンダー・スタディーズ・プログラムの数は増えており、現在も新しいプログラムが設立されている。ウィーン大学やデュッセルドルフ大学の例にも見ることができるようジェンダー

学部がない場合にも、他の学部・研究所のカリキュラムでジェンダー学の理論が紹介されたり、セミナーとして提供されたりしている。一方で、「フェミニスト」という言葉を使った新しい女性学プログラムやプログラムは存在しない。ドイツ学界にとって「フェミニズム」という言葉はまだ政治的すぎるというイメージがある。

大学外では、ジェンダー平等やダイバーシティが多く企業で推進されており、ジェンダーの主流化と関連付けられ、企業にとって有用な戦略と理解されている。しかしジェンダーを単なる「バズワード」とみなす人も多くおり、そうした人々は企業がジェンダーやダイバーシティを気にするふりをしているだけだと批判している。また一部のフェミニストは、ジェンダーが分析のカテゴリーとしての「女性」に取って代わったかのように見えるとして、これをフェミニズムの終焉とみなしている。こうしたフェミニストたちは、分析の対象としての「ジェンダー」という表現は、フェミニストの活動に役立たないと考える。反対に、ほとんどの若いジェンダー研究者や多くのクィア・フェミニストの活動家にとって、ジェンダーの新しい理解の仕方の導入は、新しい種類のフェミニズムを象徴するものだ。これを「ポスト第二波フェミニズム」と呼ぶ人もいるが、この「ポスト」とは本質主義的な理論に打ち克つという進歩を示すものと見ることもできる。

ジェンダー研究は女性研究に代わりうるものなのか？ それとも女性研究をジェンダー研究の初期段階として把握すべきか？ フェミニズムは実はジェンダー研究の一部なのか？ 具体的なコースや若い研究者を見てみると、クィア理論の位置は上昇傾向にあるようで、クィア研究を支持する人もいる。クィアという言葉も間違いなく政治的な用語であるとしてこれを批判する人も、反対に、だからこそその言葉を支持する人もいる。

初期のジェンダー研究者たちは、伝統的な科学研究が家父長的な価値観に固執し、男性のために作られたイメージや概念を使っていると批判した。ジゼラ・ボックのようなジェンダー研究者た

ちは、社会を変え、科学を変えることを望んでいた。現在、社会科学の研究においてジェンダーを無視することは不可能になっているが、自然科学においてもジェンダーはより注目されるようになってきている。学問の領域が変わったのはジェンダー研究の影響のみならず、女性が科学の世界に入ってきたこととも関係している。とはいえ、現在も不足する点は多々ある。例えば女性の学士数は全体の50%を超えているのに対し、博士及び教授レベルの学問の段階を見ると、女性の割合が非常に低いことがわかる。また、ドイツとオーストリアの大学は、法的な性転換を完全に完了していない限り、トランスジェンダーの学生を歓迎していない。

ジェンダー研究が既存の構造に適応されたことは何を意味しているのか、ジェンダー研究はどこまで自由なものか、言い換えれば、家父長制を批判するジェンダー研究がどこまで家父長制下の科学的制度に対して批判的な距離を保つことができるか、という課題は依然として残されている。特にドイツでは、大学は未だに排他的な場所で、親が高等教育を受けていない人や低所得層の家族に生まれた学生の数は少ない状況である。現在も親の学歴が子どもの大学への進学可能性に影響を及ぼす。さらに、大学は非常に強固なヒエラルキーがある場所でもある。若いジェンダー研究者たちは、協力して仕事をするのを望んでいたとしても、教職の不足により互いに競争し合う状況に置かれている。そのため、ジェンダー研究がサクセスストーリーには結びつかないと考える人も多くいる。しかし、この関係性を問いながら社会を変えることはジェンダー研究の継続的なプロセスであり、これからもジェンダー研究と共に社会も変わっていくのではないだろうか。ジェンダー研究のうち、ポストコロニアルな視点を持った現代ジェンダー研究の大部分はポストモダニズムの理論を取り入れているが、それと同時に批判理論を用いるジェンダー研究の流れも続いている。これからジェンダー研究はどのような方向に向かうのだろうか。次節ではこの課題を解説する。

5. インターセクショナリティと脱植民地主義

ドイツとオーストリアにおけるジェンダー研究のほぼ全てで使用されている概念はインターセクショナリティである。この概念自体はアメリカの法学博士であるキンバリー・クレンショールが紹介したもののだが、それ以前の米国のブラック・フェミニズムでも様々な女性間に存在する違いに焦点を当てた研究が存在していた。インターセクショナリティとは、個人の社会的アイデンティティや政治的アイデンティティが複数組み合わせることによって起こる特有の差別、もしくは特権を理解するための枠組みである。つまり性差に基づく差異や不平等が社会階級や人種、民族、セクシュアリティ、年齢等と相互に影響し合うことを説明する概念である。以前のドイツやオーストリアにはそういった研究はあまりなかった。インターセクショナリティという概念に対して行われる批判の主なポイントは、それが本質主義を弱める代わりに、アイデンティティの政治を強めてしまうことにあった。しかし、こうした批判におけるインターセクショナリティ理解には誤りがある。実際には、今日のジェンダー研究において、インターセクション(=交差点)とはアイデンティティの交差点であるだけでなく、差別の原因の社会規範や権力の力学の交差点でもあるからだ。

例えば、最新の研究は障がい者差別を分析することで、健康とはなにかということや、障害がある身体と障害がない身体を定義する基準や規範が分析される。興味深い話題だが、障がい者女性の経験と障がい者男性の経験にも違いがあり、例えば障がい者女性の方が性暴力を受けることがかなり多い。また、近年のドイツにおけるジェンダー研究では、ドイツに住む非白人の問題も分析されている。米国と違ってドイツでは人種差別がナチス時代の問題とみなされており、世論調査によれば、現在ドイツ人の多くが肌の色は問題にはならないと考えているという。だが、研究者のファ

ティマ・エル・タイェブによると、実際には、ドイツの白人がこの課題に対して持っているこうした態度そのものが非白人に対する差別を覆い隠すことになっている (El Tayeb 2011)。

また、90年代からはポストコロニアリズムがジェンダー研究に影響を与えてきた。今日、ドイツのジェンダー研究者協会の中にはジェンダー研究の脱植民主義の意思を示す研究グループがある。こうしたグループはドイツの大学の中にもジェンダー研究の中にもあり、知の生産における知的従属性、ヨーロッパ中心主義、そしてコロニアリズムを分析している。70年代の女性史の研究者は学術における男性の視線を批判していたが、現代のジェンダー研究者は学術における植民地的な視線にも批判を加えている。ジェンダー研究者協会のグループは、非西欧社会の学術研究をドイツのジェンダー研究の講義のシラバスにもっと加えるべきであり、知の生産における二者択一な様式を考案する試みが必要と考えている。

6. 大学の事例研究

次に大学の事例研究を二つ紹介したい。現在、ウィーン大学に通う全学生数は8万5000人。ウィーンはオーストリアの首都であり、その市政はかなりリベラルと言える。ウィーン大学の運営も大学のモダンでリベラルなイメージを促進することに気を配っている。しかし、大学に深く根付いた古風とも言える伝統もまだ続いている。その一つはフラタニティ (Fraternity, 男子学生たちの連帯組織) があることで、フラタニティのメンバーたちはしばしば右派に近いイデオロギーを支持している。ウィーン大学には、ジェンダー研究を行ってきた研究者たちの長い歴史がある。ジェンダー研究のプログラムが開かれる前にも、ウィーン大学学生会が毎年ジェンダーと関係ある講義のリストを刊行していた。2000年初頭には、年に800の講義がそのリストに掲載されている。

80年代以降、人文学科の特別ジェンダー研究が促進された。ジェンダー研究と関係ある講座のための特別予算の管理が行われ、さらに、毎年一人のジェンダー研究者の客員教授を呼ぶことが可能となった。1996年にはウィーン大学のジェンダー研究センターが設置された。2006年には有期の講座がつくられ、ドイツ人のシグリッド・シュミッツが最初に講座を担当した。ジェンダー研究のほとんどは人文科学の分野として扱われるが、シュミッツは生物学の教授であり、彼女の主な専門は新唯物論である。新唯物論は、社会の物質的な現象に取り組むことを可能にする新しい社会学的アプローチを切り開く可能性を論じている。

例えば彼女の著作には、神経学とジェンダーに関する著書もある。新唯物論は、5〜6年前に多くの研究者が様々な視点から「からだ (身体)」に注目していた頃、ジェンダー研究界でも話題になった。ウィーン大学のジェンダー研究所の学者によるほかのトピックとしては、ポストコロニアル理論、移民理論、批判的白人種理論、女性の同性愛の歴史等がある。2017年4月にはサビーネ・グレンツが教授の職に就任した。それ以前の2年間は指導教授不在のまま研究所が運営されており、また、現在もお正規の求人案件は存在しない。オーストリアの大学にとって、ある研究所に一つも正規の指導教授席がないことは不思議で、また異常な事態と言える。ジェンダー研究センターはさらに、大学院、学部教育と連動しながら教育活動を展開している。現在ここで550人の学生がジェンダー研究を学んでいる。

二つめ目の例は、デュッセルドルフ大学である。デュッセルドルフ大学にはジェンダー学の学科はないが、ダイバーシティ室がある。ダイバーシティ室と言っても、研究所ではなく、大学のホームページでジェンダー及び多様化などの話題を扱ったコースとして紹介されているPR部門である。2019年の段階でデュッセルドルフ大学の約30件のコースが「ジェンダー」に関係している。ほとんどのセミナーがメディア研究の分野で

あり、さらにそのほとんどがポストコロニアリズムやクィア研究を扱っている。なお、同大学の現代日本研究所でも2019年に二つの会議でジェンダーやクィアの話題が明示的に扱われ、それがきっかけになって、当時の会議員は現在、ジェンダーに関する研究を推進する異なる研究機関の学者と学際的なグループを形成しようと試みている。現代日本研究所という他の専門分野の小さなテーマとして誕生したシンポジウムでもジェンダー研究分野に影響を与えることができることを示す一例であろう。

ここでは、以上二件の事例を示すことで、ジェンダー研究がいかに多様な方法で大学教室に導入されたかを提示することを試みた。二つの事例のうち一つはジェンダー研究とは別の学部のものであり、もう一つは異なる学部のコースを通してのものだが、二つとも同じレベルで重要だと思われる。ポストコロニアル理論、クィア理論、あるいは新唯物論のような新しいアプローチも様々な形式で展開されている。

7. バックラッシュ

本論文をまとめる前に、ジェンダー研究が受けているバックラッシュに言及する必要があるだろう。ジェンダー研究の研究成果が、ドイツやオーストリアの新聞に載ったり、そこで議論されたりすることはめったにない。しかし現在新型コロナウイルスが蔓延する状況下で、「コロナが家庭生活にどのような影響を及ぼすか」「家庭内暴力に影響を及ぼすか」等のテーマについて、ジェンダー研究者にインタビューした記事は出てきた。

反対に、保守的な新聞にジェンダー研究を批判する記事が載ることがある。例えば、ジェンダー研究者がドイツ語の中にある女性への言語的差別を指摘した際には、反ジェンダー研究の意見が強まった。ジェンダー論の観点から、ドイツ語にあ

る総称男性名詞 (*generisches Maskulinum*) の使用、つまり女性を表す際でも男性形が使用されることが問題にされてきた。その問題を解決するため、あるジェンダー研究者がドイツ語という言語自体に手を加え、新しい無性形の使用を推奨した (Horscheidt 2018)。それに対していくつかの新聞が痛烈な批判を掲載し、政治家やインテリもその議論に加わって反ジェンダー研究の世論をかきたてた。他にも、ジェンダー研究をめぐる議論で最も盛んに取り上げられた論点はジェンダーフリートイレの登場であった。

右派の政治家はジェンダー研究に強く反対している。ミュンヘン大学の社会学者のウラ・イレネ・ヴィラによると、ジェンダー研究は右翼のラディカルな運動の一部に見られる反知性的、反リベラルな態度とは相容れないものである (Hark/Villa 2015)。また、ジェンダー研究の反対で右翼と同意する保守政治と組み合うことも起こる。批判者の視点からすると、ジェンダー研究は抽象的で、あまりにも現実離れしたものに見えるようである。ハンガリーやポーランドの事情とは違い、ドイツ及びオーストリアではジェンダー論に反対する人は少数だが、右派の活動に注意を払う必要がある。最近、反ジェンダー論に抵抗しジェンダー研究を守るためにソーシャルメディアで「#4GenderStudies」というハッシュタグが使われるようになった。

まとめ

ドイツ及びオーストリアにおけるジェンダー研究は、女性学と70年代の大学生の自立研究会を起源とし、それらが今なおジェンダー研究に影響を与えていることが感じられる。ポストモダンが常態化した現代においては、ジェンダー研究の一つの潮流を明確に定義づけることはきわめて難しい。しかし、ジェンダー研究が学際的、国際的になっていること、また現在クィア理論とインター

セクショナリティが主流になっていることが確認できる。違う観点から見ると、初期から現在に至るまで繰り返されている根本的なテーマもある。ドイツとオーストリアの両国で働いた経験を持つジェンダー研究者ニキータ・ダワンによれば、フェミニズム的な研究の二つの中核的な主題は、性暴力と性の平等であり、女性学もジェンダー研究もこの二つをめぐる議論を進展させてきた。さらに言えば、ジェンダー研究は権力の力学を思考するようにわれわれを促すものであり、構造的暴力、間接的暴力を主題としたこともジェンダー研究の功績である (Dhawan 2015)。ジェンダー研究が制度化されたことも、バックラッシュがあったことも、それが無政治的になっていないことを示している。

本論文では、いくつかの研究の例を挙げるとともに、ドイツ及びオーストリアにおける研究の特徴について示した。今後の課題としては、ドイツ語圏のDACH地域（ドイツ・オーストリア・スイス）におけるジェンダー研究の歴史的発達をより深く研究し、より多くの事例を検討する必要がある。その上でDACH地域と日本でのジェンダー研究の歴史的な発展比較分析を加えることも可能となるだろう。

参考文献

- Becker-Schmidt, Regina. 1985. Die doppelte Vergesellschaftung – die doppelte Unterdrückung: Besonderheiten der Frauenforschung in den Sozialwissenschaften. In: Unterkirchen, Lilo; Ina Wagner (Hrsg.). *Die andere Hälfte der Gesellschaft*. Österreichischer Soziologentag 1985. Wien: Verlag des Österreichischen Gewerkschaftsbundes.
- Bock, Gisela; Duden, Barbara. 1977. Arbeit aus Liebe – Liebe als Arbeit. Zur Entstehung der Hausarbeit im Kapitalismus. In: *Frauen und Wissenschaft: Beiträge zur Berliner Sommeruniversität 1976*. Berlin: Courage-Verlag.
- Bock, Ulla. 2015. *Pionierarbeit Die ersten Professorinnen für Frauen- und Geschlechterforschung an deutschsprachigen Hochschulen 1984-2014*. Frankfurt/M.: Campus Verlag.
- Budde, Gunilla-Friederike. 2002. Gelungener Elitenwechsel? Studentinnen in der DDR in den 50er und 60er Jahren. *Die Hochschule: Journal für Wissenschaft und Bildung* 11 vol. 2, 150-168.
- Bundesministerium für Bildung und Forschung (BMBF). 2005. *Frauen im Studium Langzeitstudie 1983 – 2004*.
- Dhawan, Nikita. 2015. Doing and Undoing Gender: Die Zukunft der Geschlechterforschung. In: Gmainer-Pranzl, Franz (Hrsg.). *Verändern Gender Studies Die Gesellschaft?* Peter Lang, D.
- Dölling, Irene. 2015. Die Institutionalisierung von Frauen- und Geschlechterforschung an ostdeutschen Universitäten: Ein Ergebnis von Kämpfen im wissenschaftlichen Feld. In: Kraus, Beate (Hrsg.). *Wissenschaftskultur und Geschlechterordnung Über die verborgenen Mechanismen männlicher Dominanz in der akademischen Welt*. Frankfurt/M.: Campus Verlag, 153-169.
- Ebeling, Smilla; Schmitz, Sigrid. 2006. *Geschlechterforschung und Naturwissenschaften Einführung in ein komplexes Wechselspiel*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Engel, Antke. 2002. *Wider die Eindeutigkeit. Sexualität und Geschlecht im Fokus queerer Politik der Repräsentation*. Frankfurt/M., New York: Campus-Verlag.
- Ferstl, Evelyn C.; Kaiser, Anelis. 2013. Sprache und Geschlecht. Wie quantitative Methoden aus der Experimental- und Neuropsychologie einen Beitrag zur Geschlechterforschung leisten können. *Gender. Zeitschrift für Geschlecht, Kultur und Gesellschaft*, vol. 3 (Gender in der psychologischen Forschung), 9-25.
- Gmainer-Pranzl, Franz; Schmutzhart, Ingrid und Anna Steinpatz. 2015. In: Gmainer-Pranzl, Franz (Hrsg.). *Verändern Gender Studies Die Gesellschaft?* Peter Lang D.
- Hark, Sabine. 1999. *Deviant Subjekte – Die paradoxe Politik der Identität*. Opladen: Leske + Budrich.
- Hark, Sabine; Villa, Paula-Irene. 2015. *Anti-Genderismus: Sexualität und Geschlecht als Schauplätze aktueller politischer Auseinandersetzungen*. Bielefeld: Transcript.
- Inken Lind; Deigner, Angelika (Hrsg.). 2009. *Frauen- und Geschlechterforschung*. GESIS - Leibniz-Institut für Sozialwissenschaften, vol. 2.
- Knapp, Gudrun-Axeli; Wetterer, Angelika. 1998. *Traditionen Brüche. Entwicklungen feministischer Theorie*. Freiburg i. Br.: Kore.
- Knapp, Gudrun-Axeli. 2012. *Im Widerstreit: Feministische Theorie in Bewegung*. Wiesbaden: Springer VS.
- Kuckuc, Ina. 1975. *Der Kampf gegen Unterdrückung. Materialien aus der deutschen Lesbierinnenbewegung*. München: Verlag Frauenoffensive.
- Lenz, Ilse. 2017. *Zum Wandel der Geschlechterordnungen im globalisierten flexibilisierten Kapitalismus. Neue Herausforderungen für die Geschlechterforschung*. Wiesbaden: Springer Fachmedien.
- Penkwitt, Meike. 2003. *Dimensionen von Gender Studies, Band II* (Freiburger FrauenStudien 13). Zentrum für

Anthropologie und Gender Studies (ZAG).

Scheu, Ursula. 1977. *Wir werden nicht als Frau geboren, wir werden dazu gemacht*. Frankfurt: Fischer-Verlag.

Ullrich, Renate. 2007. Entdeckungen zur Frauenforschung in der DDR. *die hochschule*, vol. 1, 148-161.

Zimmermann, Karin; Metz-Göckel, Sigrid. 2007. „*Vision und Mission*“ – *Die Integration von Gender in den Mainstream europäischer Forschung*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften | GWV Fachverlage GmbH.